

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択とその関連要因に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 恒男, 廣瀬, 等, 井上, 厚, Shimabukuro, Tsuneo, Hirose, Hitoshi, Inoue, Atsushi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/2142">http://hdl.handle.net/20.500.12000/2142</a>

# 沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択とその関連要因に関する研究

島袋 恒男・廣瀬 等・井上 厚\*  
(教育心理学)

## A Study on the Vocational Choice in Future of Okinawan School Children

Tsuneo SHIMABUKURO・Hitoshi HIROSE・Atsushi INOUE  
(Educational Psychology)

### I. 背景と目的

CAMI理論(唐澤ら, 1993; 島袋ら, 1995; Skinnerら, 1988)によれば, 人の目的的行動の遂行は, ①目的達成への統制感, ②一般的な手段-目的関係の理解, そして, ③その手段の保有感の3者関係のあり方からうまく予測することができる。

島袋ら(1995)は, 一般的に児童・生徒の教育的目標や親の教育的期待は高いが, 学習習慣が低く低学力といわれる沖縄県の児童の, 学習達成への統制感, その手段の理解およびその手段の保有感(CAMI尺度)の特徴について因子分析を用いて検討した。その結果, 次のような9個の因子が抽出された。①自分ができないこと的能力・運帰属, ②友達ができること・できないことの教師・運帰属, ③自分ができること的能力・運帰属, ④自分ができること的能力帰属と統制感, ⑤友達ができること・できないことの未知の原因帰属, ⑥自分の手段(教師)の保有感, ⑦友達ができないことの内的帰属, ⑧友達ができること的能力帰属, ⑨自分の手段(努力・能力・教師)の非保有感である。その全体的特徴として, 手段の認識でも手段の保有感でも「努力」帰属のまとまりが弱いことが分かる。反対に手段の認識でも手段の保有感でも「能力」と「運」の結びつきが強いことが分かる。そのような特徴を持つ学習行動の認識や意識が学習行動の習慣化を抑制し, 低学力の一因になっていることが考察された。また, 「自分ができること的能力帰属と統制感」が, 学習時間, 進

路希望水準, および学業成績と正の相関を示し, 逆に, 「自分ができないこと的能力・運帰属」が負の相関を示した。これらの結果から, 明らかに子供の将来に関する意識が, 現在の学習の認識や意識, ひいては学習行動やその成果を予測するものとなっていた。

さらに, 上の因子分析の結果と進路意識の発達を示す教育的進路成熟態度と職業的進路成熟態度との相関分析が実施された。その結果, 進学意識を反映する教育的進路成熟態度の教育的進路関心度, 教育的進路計画度がCAMI尺度の第4因子「自分ができること的能力帰属と統制感」を高め, 逆に第1因子「自分ができないこと的能力・運帰属」を弱める方向にあることが分かった。

また, 将来の職業選択に関係する職業的進路成熟態度の職業的進路関心度および職業的進路自律度が, 「自分ができること的能力帰属と統制感」を高め, 逆に, 自分ができないこと的能力・運帰属」を弱めていた。また, 沖縄の高校生の進路意識を同じくCAMI尺度を用いて検討した島袋・廣瀬ら(1996)によれば, 高校生では将来の「職業の明確性」が進路達成への統制感やそのための「努力」と「能力」の保有感につながっていた。

以上の諸結果からすれば, 小学校高学年の段階からすでに教育的進路成熟態度のみならず, 将来の職業選択に関係する職業的進路成熟態度や将来の希望職業が児童・生徒の学習行動を少なからず動機づけ, そして学習意識やその認識をも方向づ

\*現所属: 聖カタリナ女子大学

けていることが分かる。すなわち児童・生徒が抱く将来に関する見通し（時間展望や将来の目的）やその結果としての希望の有無が、現在の学習行動を動機づけていくことを予想させる。それでは時間展望を発達させた結果として、子供達は将来の目的となるどのような「職業」を心に抱いているであろうか。そしてそれは具体的に子供達の進路成熟態度とどのように関係し、学習態度のあり方や、学業成績をどの程度左右しているのであろうか。

ところで、中川（1980）によれば、子供の目的意識を育てる条件として2つの要因があるという。そのひとつは親子の間での子供の将来像に対する問いかけ、対話の成立であり、それが可能になるためには子供の仲間関係における開かれた心、他者の言動への感動体験が必要であるという。このことは子供の目的意識が人間関係の中で培われ、同時に動機づけ機能を獲得することを予想させる。このような目的意識が持つ動機づけの強さの程度が、現実の子供達の学習行動を統制するかどうかを決めると言えよう。島袋（1989）は、青年期の自己概念の研究の中で、個人目標としての理想的自己および反映的自己が現実自己を予測・説明し得る自我のあり方を「意志」の段階、そうでない場合を「願望」の段階として位置づけた。一般に前者は目標達成のために現実の行動を高く動機づけ、後者は低いことが考えられる。子供は、目的意識の発達とともに、そのような動機づけの力をも獲得していくものと思われる。そのような観点に立てば、学校教育や家庭教育のなかで教科学習のみならず、将来の目的意識の発達に関係する進路成熟態度を育成すること、将来の希望職業の意識化が重要な問題として浮上してくる。

さて、東江ら（1991）によれば、沖縄県の中・高校生の将来の職業選択の特徴として、男子では「公務員」、「コンピューター関係」、「設計士など」の選択が目立ち、一方、女子では「保母・幼稚園の先生」、「公務員」、「コンピューター関係」、「小・中・高の先生」の選択が目立つことを報告している。男女とも共通して公務員志向が認められるが、その背景には母親の子供への職業期待における安定志向が強いものと考えられ、それらの目的が子どもの生活や学習行動をどれだけ動機づけるもの

となっているか興味深い。これに関連して、沖縄県教育委員会（1992）の「児童生徒の生活意識と実態に関する調査報告書」の将来の職業選択の理由の調査結果によれば、「自分の性格に合う」（57.5%）、「自分の能力を生かせる」（56.2%）の2つの理由が圧倒的多数を占めている。それでは能力はさておき、児童・生徒はどのような性格特徴もっているであろうか。児童・生徒の自己像の特徴として同報告書によれば、「短気」（38.6%）、「集中力がない」（36.8%）、「なにごともし長続きしない」（29.8%）を主なものとして挙げられている。このような結果から、果たしてどれだけの児童・生徒が自分の性格に合う職業を将来選べるか懸念が残る。加えて、沖縄県教育委員会（1992）の「保護者の家庭教育等に関する意識・実態調査」の子供の進路決定に関する調査結果によれば、保護者は子供の進路選択の基準を問う質問への回答として、「子供自身の考えで」（86.7%）を圧倒的に挙げている。一見すると子どもの自主性の尊重と言えなくもないが、しかし、先の子供の職業選択の理由の結果を見るとそのまま額面通りに受け取る訳にはいかない。

このように考えていくと、沖縄県の児童・生徒の目的意識としての将来の「職業」の選択は、自我の「願望」的色彩が強く現れていると見ることができる。換言すれば、目的意識が現在の生活や学習行動等をコントロールし得るものになっていない可能性がうかがえる。また、そのことは進路意識の発達やそれを促す進路指導に問題を抱えていることを予測される。

本研究は上の問題意識から沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択の特徴を明らかにすることを主目的としている。沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択はどのような特徴を示し、それは男児と女児ではどのような差があり、発達のどう変化していくであろうか。そして、第2の目的として、将来の職業選択が彼らの進学希望水準の高さや、学習行動、学業成績の要因をどの程度説明し得るかについて検討する。なお、将来の職業選択と進路成熟態度との関係は、廣瀬・島袋・井上（1996）で検討される。

## II. 方法と手続き

### 1) 調査対象者

沖縄県都市部の小学校2校、農村部の小学校1校(298人)、同じく中学校2校と1校(314人)、普通高校2校と1校(456人)が本研究の調査対象者である。小学校では5年生と6年生が、中学校と高校ではそれぞれ2年生が対象とされた。学校種別、性別内訳を表1に示した。

表1 被調査者の内訳

	小学校	中学校	高等学校	計
男子	158* (30.3)	153 (29.4)	210 (40.3)	521 (48.8)
女子	140 (25.6)	160 (29.3)	246 (45.1)	546 (51.2)
計	298 (27.9)	314 (29.4)	456 (42.7)	1068 (100.0)

\* 単位:人 ( )内:%

また、児童・生徒の選択した職業を詳細に分類するため、大学生男女40人に図1に示す職業群を「児童・生徒から見た一般的な人気度」という観点から5件法で評定させた。そして、人気度の距離行列に基づいて、クラスター(ワード法)分析を実施し、8個の職業のクラスターを抽出した。

### 2) 調査尺度

将来の職業選択: 図1に示す25種類の職業群(東江ら, 1991)を挙げ、児童・生徒が希望する「将来の職業」をひとつ選択させた。

学習行動・進路希望水準・学業成績の自己評価の項目: 家庭学習時間の長さ、将来の進学希望水準および親の進学期待水準の認知、国語の成績の自己評価および数学の成績の自己評価について、それぞれ4件法ないし5件法で回答させた。

### 3) 分析の方法

各児童・生徒の将来の職業選択を、大学生の「児童・生徒の職業の人気度」による8個のクラスターに従って再カテゴリー化した。そして、家庭学習時間、将来の進学希望水準、認知された親の進学期待水準、および国語・数学の成績の自己評価の要因とのクロス集計を行い、 $\chi^2$ 検定を実施した。

## III. 結果と考察

### 1. 大学生の「児童・生徒の職業の人気度」のクラスター分析

本研究の主目的は、沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択の特徴と学習行動や進路希望との関連を検討することである。しかし、児童・生徒が希望する職業は多岐にわたっており、ひとつひとつの職業毎に検討する訳にはいかない。そこで、何らかの意味で類似した少数の職業群にまとめる目的で、大学生に25種類の職業を「児童・生徒にとっての人気度」という観点から5段階評定をさせ、類似度行列に基づく8個のクラスターを抽出した。

図1はそのクラスター分析の結果を示している。第1クラスターは、「設計士・技術者」、「司法書士・税理士」、「国家公務員」が類似したものとしてひとつにまとまっている。ここでの「国家公務員」はエリート官僚ではなく、沖縄でなじみのある中級公務員を意味していると思われる。さて、この3つの職業の共通性は何であろうか。まず言えることはどちらも高学歴が必要ということ、そして資格と試験を必要とするということ、いずれも事務所や役所という場所で仕事を行うということであろう。そこで第1クラスターを「知的・オフィスワーク」と名づけた。第2クラスターは、「大学の先生・研究者」、「大工・職人」、「運転手」、「自営業」が類似したものとしてまとまっている。後の3つの職業は明らかに人気度が低く、そして、「大学の先生・研究者」はそれほど人気度は低くないが、一般にはなじみが薄いイメージをもつものと思われる。そのようなことから、第2クラスターを「なりにくい・人気のない職業」と見なした。第3のクラスターは、「コンピューター関係」、「農業・漁業」、「不動産関係」がひとつにま

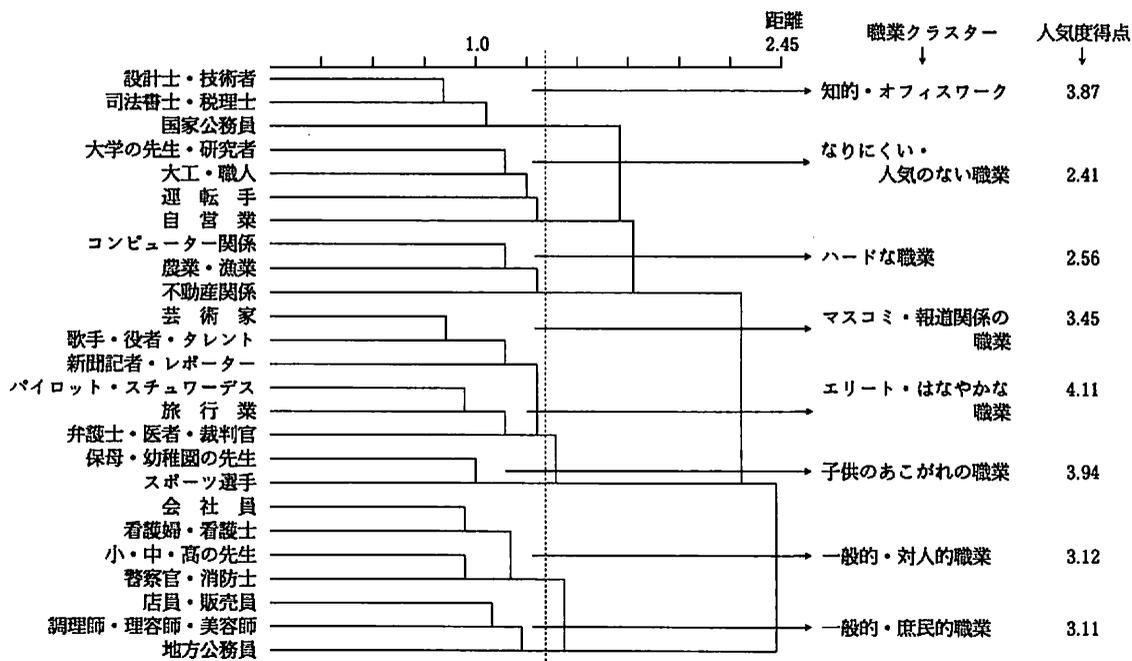


図1 「職業」の一般的人気度のクラスター分析

とまっている。この3つの職業の類似性は何であろうか。農業・漁業は肉体労働であり、不動産関係も建設業が関与していることでは肉体労働のイメージがある。また、コンピューター関係ではテクノ・ストレスという言葉が聞かれ、心理的にハードな仕事というイメージがあると考えられる。このようなことからこのクラスターを心身の「ハードな職業」と見なしても差し支えない。第4クラスターは、「芸術家」、「歌手・役者・タレント」、「新聞記者・レポーター」がひとつになっている。いずれの職業もマスコミに関係しており、「マスコミ・報道関係の職業」ということができる。第5クラスターは、最も人気度の高い「パイロット・スチュワーデス」、「弁護士・医者・裁判官」と「旅行業」がひとつになっている。前2者は高給・エリートというイメージでひとつにまとまっていると思われる。旅行業にはそのイメージは弱いと思われるが、今流行の若者向けのトレンドで時代の先端に行く華やかなイメージがあるかも知れない。そこでこのクラスターを「エリート・はなやかな職業」と名づけた。そして、第6クラスターは「保育・幼稚園の先生」、「スポーツ選手」がひ

とつになっている。前者は主に小学生女兒の、後者は男児の希望を表していると思われることから、このクラスターは、「子供のあこがれの職業」と見なすことができる。次に第7クラスターは、「会社員」、「看護婦(士)」、「小・中・高の先生」、「警察官・消防士」がひとつになっている。この4つの職業に共通するのは、ある程度の高学歴が必要ということ、日常生活で身近な職業ということであろう。また対人的サービス業という点でも共通していることから、「一般的・対人的職業」のクラスターとして理解できる。最後に残った第8クラスターは、「店員・販売員」、「調理師・理容師・美容師」、「地方公務員」がひとつにまとまっている。地方公務員を除いてそれほど高学歴を必要としないが、いずれも町の中や日常生活の中で身近な職業であり「一般的・庶民的な職業」のクラスターと見てもよいと思われる。

以上に大学生の評定に基づく「児童・生徒にとっての職業の人気度」のクラスターについて紹介した。この結果がそのまま児童・生徒の職業の人気度をそのまま表すものではないが、クラスターの内容から児童・生徒の職業意識をかなりの程度反

映していると思われる。ちなみに各クラスターの人気度の平均は次のようになっている。当然のことながら最も人気の高いのは「エリート・はなやかな職業」の4.11である。それに続いて「子供のあこがれの職業 (3.94) の人気も高い。そして、「知的・オフィスワーク」(3.87) も人気が高い。そして「マスコミ・報道関係の職業」(3.45) はやや人気が高いと言える。また、「一般的・対人的職業」(3.12), 「一般的・庶民的職業」(3.11) は平均的な人気度と言える。逆に, 「なりにくい・人気のない職業」(2.41), 「ハードな職業」(2.56) の人気度は当然のことながら最も低い。

さて, ここで示した職業のクラスターから見た場合, 沖縄県の児童・生徒の希望する将来の職業選択にはどのような特徴が見られるであろうか。

## 2. 児童・生徒の職業選択の性差と学校種(発達)の差

ここでは前節で検討した職業のクラスターに基づいて, 沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択の

特徴とその性差と発達の傾向について検討する。

表2は児童・生徒によって選択された個々の職業を各クラスターにまとめ, それと性とのクロス集計および $\chi^2$ テストの結果を示したものである。 $\chi^2$ テストの結果は男女間に職業選択に差のあることを示している。その前に, 将来の職業選択の全体的特徴から述べる。男女とも相対的に高率で選択されているのが, 「子供のあこがれの職業」(16.6%), および「一般的・対人的職業」(16.6%), 「知的・オフィスワーク」(16.1%), 「一般的・庶民的職業」(14.6%)である。逆に, 選択率の低いのが「ハードな職業」(5.4%), 「マスコミ・報道関係の職業」(8.4%), 「なりにくい・人気のない職業」(8.9%)である。このような結果から, 児童・生徒の職業選択の基準として, 職業のVisibility (職業の顕著性) による日常生活の中での身近さの影響が強く, また, いわゆる3K的な色彩をもつ職業は選択されにくいことを示している。そして, 一部の児童・生徒では高学歴志向の影響が強いことを予測させる。

表2 将来の職業選択の性差

職業 クラスター	1**	2	3	4	5	6	7	8	計
男子	121* (22.4)	62 (11.5)	35 (6.5)	31 (5.7)	54 (10.0)	93 (17.2)	76 (14.1)	68 (12.6)	540 (50.3)
女子	52 (9.7)	33 (6.2)	23 (4.3)	59 (11.0)	66 (12.4)	88 (16.5)	124 (23.2)	89 (16.7)	534 (49.7)
計	173 (16.1)	95 (8.9)	58 (5.4)	90 (9.0)	120 (11.2)	181 (16.9)	200 (16.6)	157 (14.6)	1074 (100.0)

\* 単位:人 ( )内:%  $\chi^2=64.412$   $p<.001$   $df=7$

\*\* 1=知的オフィスワーク 2=なりにくい・人気のない職業  
3=ハードな職業 4=マスコミ・報道関係 5=エリート・はなやかな職業  
6=子供のあこがれの職業 7=一般的・対人的職業 8=一般的・庶民的職業

それでは, 将来の職業選択の性差について検討する。女子に比較して男子は「知的・オフィスワーク」(22.4% vs 9.7%), 「なりにくい・人気のない職業」(11.5% vs 6.2%) の選択率が高くなっ

ている。この2つのクラスターで男子の選択が高いのは, 男子の高学歴志向の強さを反映していると思える。すなわち, 両クラスターには「国家公務員」や「大学の先生・研究者」が

含まれており、それらの職業の希望が男子に強いと思われる。

逆に女子は「マスコミ・報道関係の職業」(5.7% vs 11.0%), 「一般的・対人的職業」(14.1% vs 23.2%), 「一般的・庶民的職業」(12.6% vs 16.7%) の選択率が男子より多い。テレビに写るアイドルやタレント, レポーターなどで女性の活躍が目だつことが女子に強い影響を与えていると見られる。また, 看護婦, 小学校の先生, 店員, 美容師などの希望が女子に強いことも反映していると思われる。

次に, 将来の職業選択の発達の傾向について検討する。表3は職業のクラスターと小・中・高校生の要因とのクロス集計および $\chi^2$ テストの結果を示している。 $\chi^2$ テストの結果は小・中・高校生の間に職業選択の差があることを示している。

まず, 中学生に比較して小学生の選択率の高いのは, 「なりにくい・人気のない職業」(11.4%) であり, この結果には勉強のできる子供の「大学の先生・研究者」への希望が反映していると思われる。また, 「子供のあこがれの職業」(36.3%) も小学生での選択率が高い。この結果は具体的には女兒の「保母・幼稚園の先生」と男児の「スポー

ツ選手」への希望である。そして, 「エリート・はなやかな職業」(10.7%) の選択率も小学生に高いことを示し, いずれの選択にも子どもに特徴的な願望の色彩が現れていると見させる結果である。次に, 中学生の職業選択の特徴について検討する。高校生と比較して中学生において, 選択率の高いのが「マスコミ・報道関係の職業」(10.1% vs 6.7%) であり, テレビや芸能界への興味が中学生に強いことがうかがえる。そして, 「子供のあこがれの職業」(15.5% vs 6.4%) の選択も中学生で高いが, この結果は女兒の「保母・幼稚園の先生」の希望が高いこと, 一部の生徒に願望の要素が残っていることを示している。これに加えて, 専修学校レベルの学歴を必要とする「一般的・庶民的職業」(20.2% vs 14.8%) の選択率も中学生において高い。しかし, 大学レベルの学歴を必要とする「一般的・対人的職業」と「知的・オフィスワーク」の選択は高校生において高いが, 中学生でも相対的に高くなっている(15.2%, 16.5%)。このような結果から中学生の将来の職業選択は, 小学生のレベルの願望の色彩を残しながらも次第に現実の学業成績に基づくものになりつつあると言える。

表3 将来の職業選択の学校種差(学年差)

職業 クラスター	1**	2	3	4	5	6	7	8	計
小学生	17* (6.1)	32 (11.4)	12 (4.3)	29 (10.3)	30 (10.7)	102 (36.3)	33 (11.7)	26 (9.3)	281 (28.6)
中学生	45 (15.2)	27 (9.1)	18 (6.1)	30 (10.1)	22 (7.4)	46 (15.5)	49 (16.5)	60 (20.2)	297 (30.2)
高校生	85 (20.9)	34 (8.4)	25 (6.2)	27 (6.7)	57 (14.0)	26 (6.4)	92 (22.7)	60 (14.8)	406 (41.3)
計	147 (14.9)	93 (9.5)	55 (5.6)	86 (8.7)	109 (11.1)	174 (17.7)	174 (17.7)	146 (14.8)	984 (100.0)

\* 単位:人 ( )内:%  $\chi^2=146.142$   $p<.001$   $df=14$

\*\* 1=知的オフィスワーク 2=なりにくい・人気のない職業

3=ハードな職業 4=マスコミ・報道関係 5=エリート・はなやかな職業

6=子供のあこがれの職業 7=一般的・対人的職業 8=一般的・庶民的職業

小・中学生に比較して社会的認識や自我が発達していると思われる高校生の将来の職業選択はどのような特徴を示すであろうか。高校生で選択率の高くなっている職業のクラスターは、高学歴を必要とする「知的・オフィスワーク」(20.9%)、「エリート・はなやかな職業」(14.0%)、「一般的・対人的職業」(22.7%)である。それとは反対に「ハードな職業」(6.4%)、「子供のおこがれの職業」(6.4%)、「マスコミ・報道関係の職業」(6.7%)の選択は小・中学生に比較して確実に減少している。このようなことから高校生の将来の職業選択は、自己の学業成績と関連づけながらなされていることがうかがえる。すなわち、高校生の将来の職業選択は願望的要素が影を潜めるようになり、次第に現実的、意志的要素が反映される方向に発達すると言える。

### 3. 児童・生徒の進学希望・親の期待水準と将来の職業選択

前節での分析結果から、概して男子は親の高学歴期待の影響を受けた将来の職業選択をするのに対して、女子は中程度の学歴を必要とする現実的な職業希望の強いことが示された。また、その発

達差の分析から小学生には願望的職業選択と一部高学歴志向による職業選択が見られること、それに対して高校生では高学歴志向の職業選択と、現実的職業選択の2分化傾向のあることが分かった。明らかに児童・生徒の将来の職業選択には、高学歴期待・志向が影響を与えていると言える。そこで、本節では児童・生徒の将来の職業選択が彼らの進学希望水準、親の進学期待水準の要因にどのような影響を受けているかについて分析・考察する。

表4は児童・生徒の将来の職業選択と進学希望水準とのクロス集計および $\chi^2$ テストの結果を示したものである。 $\chi^2$ テストの結果は進学希望水準によって有意な職業選択のちがいがあつたことを示している。表4の結果から「高校まで」という進学希望水準を示す児童・生徒の将来の職業選択として、「子供のおこがれの職業」(36.4%)の選択が目だっている。次いで「なりにくい・人気のない職業」(11.9%)、「知的・オフィスワーク」(10.5%)の選択率が相対的に高くなっている。しかし、ここで言う「知的・オフィスワーク」はいずれも高学歴が必要であり、進学希望水準と相入れない非現実的職業選択である。

表4 将来の職業選択と進学希望水準

職業 クラスター	1**	2	3	4	5	6	7	8	計
高校まで	11* (7.7)	17 (11.9)	1 (0.6)	7 (4.9)	47 (32.9)	52 (36.4)	12 (8.4)	25 (17.5)	143 (13.4)
短大・ 専門	14 (6.1)	8 (3.4)	13 (5.6)	29 (12.6)	42 (18.2)	48 (20.8)	35 (15.2)	50 (21.7)	231 (21.7)
大学以上	130 (15.6)	64 (7.7)	34 (4.1)	77 (9.2)	72 (8.6)	108 (12.9)	168 (20.1)	117 (14.0)	835 (78.4)
計	155 (14.5)	89 (8.4)	48 (4.5)	113 (10.6)	161 (15.1)	208 (19.5)	215 (20.2)	192 (18.0)	1065 (100.0)

\* 単位：人 ( )内：%  $\chi^2=74.52$   $p<.001$   $df=14$

\*\* 1=知的オフィスワーク 2=なりにくい・人気のない職業

3=ハードな職業 4=マスコミ・報道関係 5=エリート・はなやかな職業

6=子供のおこがれの職業 7=一般的・対人的職業 8=一般的・庶民的職業

それに対して、「短大・専門学校」までの進学希望を持つ児童・生徒は、それ相当の「マスコミ・報道関係の職業」(12.6%)、「一般的・庶民的な職業」(21.7%)の選択率が相対的に高いが、しかし、高学歴を必要とする「エリート・はなやかな職業」(18.2%)、「一般的・対人的職業」(15.2%)の選択率も高く、このグループでも職業選択と進学希望水準が一致しない傾向がある。

それでは「大学以上」の進学希望を持つ児童・生徒はどのような職業選択をしているであろうか。最も選択率の高いのは「知的・オフィスワーク」(15.6%)と「一般的・対人的職業」(20.1%)であり、次いで「エリート・はなやかな職業」(8.6%)も相対的に選択率が高い。いずれも高学歴を必要とする職業であり、それ相応の職業選択と言える。

以上に検討したように、児童・生徒の将来の職業選択は基本的に彼らの進学希望水準に対応したものとなっている。しかし、職業への認識が弱い

せいか、進学希望水準と一致しない者が一部に居ることを示している。

それでは親の進学期待に対する子供の認知と児童・生徒の将来の職業選択はどのような関係にあるだろうか。

表5は親の進学期待に対する子供の認知と将来の職業選択のクロス集計および $\chi^2$ テストの結果を示している。 $\chi^2$ テストの結果親の進学期待に対する子供の認知のちがいによって、子供の将来の職業選択に差異のあることを示している。まず「高校まで」という進学期待の認知を持つ児童・生徒の中に「子供のあこがれの職業」(37.4%)の選択率の高いことが分かる。その次に多いのが「一般的・庶民的職業」(16.2%)、「なりにくい・人気のない職業」(15.2%)の選択である。また高学歴を必要とする「知的・オフィスワーク」(10.1%)も比較的多く選択されている。ほぼ先の進学希望水準の場合と一致した結果である。

表5 将来の職業選択と進学期待水準

職業 クラスター	1**	2	3	4	5	6	7	8	計
高校まで	10* (10.1)	15 (15.2)	3 (3.0)	6 (6.1)	5 (5.1)	37 (37.4)	7 (7.1)	16 (16.2)	99 (9.3)
短大・ 専門	7 (5.3)	11 (8.4)	7 (5.3)	12 (9.2)	17 (13.0)	35 (26.7)	21 (16.0)	21 (16.0)	131 (12.3)
大学以上	156 (18.7)	69 (8.3)	48 (5.8)	71 (8.5)	98 (11.7)	108 (12.9)	168 (20.1)	117 (14.0)	835 (78.4)
計	173 (16.2)	95 (8.9)	58 (5.5)	89 (8.4)	120 (11.3)	180 (19.9)	196 (18.4)	154 (14.5)	1065 (100.0)

\* 単位：人 ( )内：%  $\chi^2=74.52$   $p<.001$   $df=14$

\*\* 1=知的オフィスワーク 2=なりにくい・人気のない職業

3=ハードな職業 4=マスコミ・報道関係 5=エリート・はなやかな職業

6=子供のあこがれの職業 7=一般的・対人的職業 8=一般的・庶民的職業

次に「短大・専門学校まで」の進学期待の認知を持つ児童・生徒の場合も「子供のあこがれの職

業」(26.7%)の選択が目だっている。この結果には女子の「保育・幼稚園の先生」の選択が反映

していると見られる。また、「エリート・はなやかな職業」(13.0%)の選択率も相対的に高いが、この結果には「旅行業」の選択が多いことを反映していると思われる。そして、「一般的・対人的職業」(16.0%)の選択も比較的多い。このような結果から、「高校まで」という児童・生徒の結果に比較して「短大・専門学校まで」という進学期待を認知している児童・生徒は現実的な職業希望をもっていると考えられる。

さて、「大学以上」という進学期待の認知を持つ児童・生徒の将来の職業選択として、最も選択率の高いのが「一般的・対人的職業」(20.1%)である。このクラスターの中には、「会社員」、「看護婦・看護師」、「小・中・高の先生」、「警察官・消防士」が含まれており、一般的になじみの深い職業であり、かつ大学卒やそれに近い専門的な教育を必要とする学歴が必要である。その次に選択率の高いのが同じく「知的・オフィスワーク」(18.7%)であり、「エリート・はなやかな職業」(11.7%)が続いている。明らかにこのグループには、いわゆる「勉強のできる子供」が多いと思われる、学業成績に応じた将来の職業選択をしていることが分かる。

#### 4. 児童・生徒の学習時間、学業成績と将来の職業選択

前節で検討したように児童・生徒の将来の職業選択の内容は、彼らの進学希望水準や親の進学期待に対する子供の認知と基本的に対応するものであった。それでは、児童・生徒の将来の職業選択は、彼らの現在の学習行動や学業成績によってどの程度説明されるであろうか。

表6は家庭学習時間と将来の職業選択のクロス集計および $\chi^2$ テストの結果を示している。表6より、家庭学習時間が「30分以下」の児童・生徒の将来の職業選択として相対的に目だつのが「一般的・対人的職業」(19.1%)、「知的・オフィスワーク」(15.7%)である。この2つのクラスターはいずれも高学歴を必要とする職業群であり、その点で目標と現実の不一致があり、手段-目的関係の理解が不十分な児童・生徒であると思われる。それに対して「1時間程度」の学習時間を示す児童・生徒には、「子供のあこがれの職業」(18.9%)の選択が目だつが、多分に女子の「保育・幼稚園の先生」の選択の多さを反映していると思われる。また、「30分以下」の児童・生徒と同様に「知的・オフィスワーク」(16.9%)、「一般的・庶民的職

表6 将来の職業選択と家庭学習時間

職業 クラスター	1**	2	3	4	5	6	7	8	計
30分以下	102* (15.7)	56 (8.6)	36 (5.5)	56 (8.6)	65 (10.0)	104 (16.0)	124 (19.1)	108 (16.0)	651 (60.5)
1時間	51 (16.9)	31 (10.3)	15 (5.0)	26 (8.6)	25 (8.3)	57 (18.9)	56 (18.5)	41 (13.6)	302 (28.1)
2時間 以上	21 (17.1)	8 (6.5)	7 (5.7)	8 (6.5)	31 (25.0)	20 (16.3)	19 (15.5)	9 (7.3)	123 (11.4)
計	174 (16.2)	95 (8.8)	58 (5.4)	90 (8.4)	121 (11.3)	181 (18.5)	199 (18.5)	158 (14.7)	1076 (100.0)

\* 単位：人 ( )内：%  $\chi^2=35.26$   $p<.001$   $df=14$

\*\* 1=知的オフィスワーク 2=なりにくい・人気のない職業

3=ハードな職業 4=マスコミ・報道関係 5=エリート・はなやかな職業

6=子供のあこがれの職業 7=一般的・対人的職業 8=一般的・庶民的職業

業」(13.6%)の選択率も相対的に高くなっている。

次に「2時間以上」の家庭学習時間を持つ児童・生徒の将来の職業選択はどのようになっているであろうか。表6から分かるように、勉強時間の長い児童・生徒には高学歴で、かつ国家試験などのある「高給・はなやかな職業」(25.0%)、「知的・オフィスワーク」(17.1%)の選択が多く、また大学レベルの教育を必要とする「一般的・対人的職業」(15.5%)も選択されている。つまり勉強時間の長い子供の多くは、将来の目的達成をめざして勉学に励んでいることをうかがわせている。

さて、家庭学習時間の長短と将来の職業選択の間には明らかに関係の深いことが示されたが、そのことは学業成績によっても説明されるものと予

測される。

表7、表8は国語、数学(算数)の成績の自己評価の高低と、将来の職業選択とのクロス集計および $\chi^2$ テストの結果を示したものである。まず国語の成績との関連から検討する。表7の結果から国語の勉強が「とてもよく理解できる・よく理解できる」と答えた児童・生徒の将来の職業選択として、「知的・オフィスワーク」(19.3%)、「エリート・はなやかな職業」(16.9%)の選択率が相対的に高いことが分かる。また、「一般的・対人的職業」(18.3%)も選択されている。この結果は「数学の成績」の場合も同様の傾向を示している。このことから、明らかに学業成績の高い児童・生徒が高学歴を必要とする職業を選択・希望していることが分かる。

表7 将来の職業選択と国語の成績の評価

職業クラスター	1**	2	3	4	5	6	7	8	計
とても・よく理解	41* (19.3)	21 (9.9)	9 (4.2)	19 (8.9)	36 (16.9)	31 (14.6)	38 (18.3)	17 (8.0)	213 (19.7)
理解できる	99 (14.9)	53 (8.0)	36 (5.4)	60 (9.1)	69 (10.4)	116 (17.5)	125 (18.9)	105 (15.8)	663 (61.4)
理解できない	34 (16.8)	21 (10.3)	13 (6.4)	11 (5.4)	16 (7.9)	35 (17.2)	37 (18.2)	36 (17.7)	203 (18.8)
計	174 (16.1)	95 (8.8)	58 (5.4)	90 (8.4)	121 (11.3)	182 (18.5)	201 (18.6)	158 (14.6)	1079 (100.0)

\* 単位：人 ( )内：%  $\chi^2=24.58$   $p<.001$   $df=14$

\*\* 1=知的オフィスワーク 2=なりにくい・人気のない職業  
3=ハードな職業 4=マスコミ・報道関係 5=エリート・はなやかな職業  
6=子供のあこがれの職業 7=一般的・対人的職業 8=一般的・庶民的職業

それに対して、国語の勉強が「理解できる」、「理解できない」と答えた児童・生徒の将来の職業選択は、「子供のあこがれの職業」(17.5%, 17.2%)、「一般的・庶民的職業」(15.8%, 17.7%)の選択が目だっている。この結果は「数学の成績」の場合も同様である。そして、このグループには

「知的・オフィスワーク」、「一般的・対人的職業」の選択も相対的に高く、職業選択の達成における手段-目的関係の理解に問題を抱える児童・生徒が含まれていると思われる。

また、「数学の成績」の場合において勉強の「とてもよく理解できる・よく理解できる」児童・

表 8 将来の職業選択と数学（算数）の成績の評価

職業 クラスター	1**	2	3	4	5	6	7	8	計
とても・ よく理解	46* (20.4)	22 (9.7)	21 (9.3)	7 (3.1)	31 (13.7)	28 (12.4)	45 (19.9)	26 (11.5)	226 (21.0)
理解 できる	91 (17.3)	48 (9.1)	29 (5.5)	49 (9.3)	52 (9.9)	76 (14.5)	101 (19.2)	79 (15.1)	525 (48.8)
理解で きない	36 (11.0)	25 (7.7)	8 (2.5)	33 (10.2)	38 (12.0)	77 (23.7)	55 (16.9)	53 (16.3)	325 (30.2)
計	173 (16.1)	95 (8.8)	58 (5.3)	89 (8.3)	121 (11.3)	181 (16.8)	201 (18.7)	158 (14.7)	1076 (100.0)

\* 単位：人 ( )内：%  $\chi^2=48.475$   $p<.001$   $df=14$

\*\* 1=知的オフィスワーク 2=なりにくい・人気のない職業

3=ハードな職業 4=マスコミ・報道関係 5=エリート・はなやかな職業

6=子供のあこがれの職業 7=一般的・対人的職業 8=一般的・庶民的職業

生徒の「ハードな職業」の選択が高いのは、数学の能力に関係する「コンピューター関係」の選択を反映しているものと考えられる。

以上の結果から、いわゆる「勉強のできる子」には将来の希望として「知的・オフィスワーク」、「エリート・はなやかな職業」、「一般的・対人的職業」の選択の多いこと、逆に「勉強のできない子」には「子どものあこがれの職業」、「一般的・庶民的職業」の選択の多いことが分かる。

今後の課題として、彼らが希望する職業の具体的な理解のあり方やイメージ（情緒的意味）を捉え、中川（1980）の指摘する「感動する心」との関係を検討することが残されている。そして彼らの将来の職業選択において、職業的・教育的進路発達や目的意識の発達を含めた検討が必要であると思われる。

### 引用文献

東江平之ほか 1991 沖縄における教育的・社会的適応行動に関する研究 平成元年度特定研究紀要 琉球大学法文学部  
 廣瀬等 島袋恒男 井上厚 1996 沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択と進路成熟度の関連 琉球大学教育学部紀要, 49 (印刷中)

唐澤真弓 宮下孝弘 東洋 1993 学習意欲と原因帰属に関する国際比較研究 - CAMI による調査 (中間報告) - 発達研究, 9, 87-98.  
 中川作一 1980 子どもの目的意識を育てる条件 未来をひらく教育, 60, 27-45.  
 沖縄県教育委員会 1992 児童生徒の生活意識と実態に関する調査報告書  
 沖縄県教育委員会 1992 保護者の家庭教育等に関する意識・実態調査  
 島袋恒男 1989 青年期の社会的認知と自己像の関係性についての研究 琉球大学法文学部紀要, 社会学篇, 31, 189-208.  
 島袋恒男 井上厚ほか 1995 沖縄県の児童の進路発達と学習の原因帰属に関する研究 琉球大学教育学部紀要, 46, 101-114.  
 島袋恒男 廣瀬等ほか 1996 高校生の進路達成への統制感とその手段の保有感と認知に関する研究 (I) 琉球大学法文学部人間科学系紀要「ヒューマンサイエンス」, 2, 69-88.  
 Skinner, E.A., Chapman, M., & Baltes, P.B. 1988 Control, means-end, and agency: A new conceptualization and its measurement during childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 117-133.